

七夕の日に...

ReiRan—零蘭—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雪ノ下陽乃さんの誕生日記念作品です。pixivにも上げています。

pixivはこちら：<https://www.pixiv.net/users/>

20587363

七夕の日に

目

次

七夕の日に…

七夕前夜、彼女の誘い

7月6日 20:00頃

プルルルルルルルル

八幡「うげつ。雪ノ下さんからの電話だよ…。無視一択だな。」トオイメ

You get a mail you get a mail

八幡「今度はメール…。さて、俺は何も見ていないつと。」

ドンドン

ガチャ

小町「おい、ごみいちやん。」

八幡「どうしたの、小町ちゃん。なんだか怖いわよ。」

小町「電話、メール、陽乃さん。わかるよね?」ニコツ

八幡「はい。次は出ます。」

小町「ん。じやあお兄ちゃん、明日頑張つてね♪！」

ガチヤン

八幡「何だつたんだ…？」

ブルルr

八幡「（来たよ）はい、もしもし。比企谷です。」

陽乃『ひやつはろゝ比企谷君。おねえさんの連絡を無視するとはい度胸だねえ。』

八幡「申し訳ございませんでした。正直な話、少し怖くて。』

陽乃『まあ、こうして出てくれたから今は許してあげよう』

八幡「そりやどうも。ところでわざわざ電話をよこすなんてどうしたんですか？』

陽乃『比企谷君。明日つて暇？』

八幡「いえ、明日は学校と部活があるので。』

陽乃『うーん。そしたらさ、雪乃ちゃんには私から言うからさ。明日、わたしと放課後デートをしよう！』

八幡「（雪ノ下さんさんが突拍子がないのはいつもだが、なぜ明日なんだ…。）え、普通に嫌です。』

陽乃『え？比企谷君。拒否権なんてないよ？』

八幡「（雪ノ下さんさんが明日にこだわる理由はなんだ…。）マジですか。俺、財布そんなに暖かくないんですけど…。』

陽乃『お金のことは気にしなくていいし、わたしが誘つたんだから貸しつてことにも殊にもしないから。お願ひ！明日の七夕は君と過ごしたいんだよ。』

八幡「(そういえば、雪ノ下さんの誕生日は7月7日。)あー、そういうことか。」ボソッ

陽乃『ん？何がそう言うことなの？』

八幡「あー、いえ。こちらの話です。(あぶねー、声に出てた。)」

陽乃『フーン。でさ、明日は大体19：00くらいに駅に来てほしいんだけど。』

八幡「はあ。わかりましたよ。どうせ俺に拒否権なんてないんでしょ？」

陽乃『じやあ、お願ひねー。』

八幡「(まつたく。)誕生日を祝つてほしいんならそう言つてくれればいいんですけどね。」ボソッ

陽乃『ふえ？ひ、比企谷君？』

八幡「なんですか、雪ノ下さん。もう切れますからね。」

陽乃『あ、うん。おやすみ……。』

ツーツーツー

八幡「明日、なんか買ってから行くか。」

§

陽乃 side

八幡『（まつたく。）誕生日を祝つてほしいんならそう言つてくれればいいんですけどね。』ボソツ

陽乃「ふえ？ひ、比企谷君？」

八幡『なんですか、雪ノ下さん。もう切れますからね。』

陽乃「あ、うん。おやすみ…」

ツーツーツー

陽乃「比企谷君、もしかして私が誕生日に一緒にいたいってことわかつたつてこと…？」

「…もー、いつつもはニブチンなくせにこういうとこだけは鋭いんだからー！」カオマツカ
「…でも、楽しみだな♪」フンフーン

ママノン「陽乃さん、大丈夫かしら…？」

陽乃「明日はどんな服着ていこうかな♪。ちょっとくらい攻めてみてもいいかな♪。」

かくして、雪ノ下陽乃は、ろくに寝れないまま次の日を迎えるのであつた。

§

七夕当日彼女の思い

八幡 side

八幡「今日は雪ノ下さんと出かける日か…。一応家に帰つて服を着替える時間はあるだろうが…。でも、プレゼントをそのあと買うことを考へるとな…。よし、とりあえずはプレゼント優先だな。」

〈数時間後〉

キラツケーレー

アリガトウゴザイマシタ

八幡（放課後か。時間も惜しいしな。）悪い、由比ヶ浜。俺今日部活出れないわ。雪ノ下にも伝えといてくれ。」

結衣「あ、うん。じゃあねー。」

八幡「ん。」

八幡「さて、じゃあ行きますかね。」

〈十数分後〉

八幡「（さて、駅前のショッピングモールに来たわけだが……。）とりあえず適当に回つてよさげなものを探すか。とりあえず集合時間まで一時間半はあるからな。」

〈少年、散策中〉

八幡「まずいな、あと30分。そろそろ決めないと……。」

「おっ。あの人には似合いそうだな。ギリ予算内だしこれにしよう。」

「あと25分か。何とか大丈夫だろ。」

§

陽乃 s i d e

陽乃「はあ、私つてば楽しみにしそうでしょ。まだ30分も前じゃない……。服だつて普段は着ないようなちよつとカワイイ系のやつだし……。」

「まあ、比企谷君が約束をすっぽかすとも思えないから待つてようかな。」
「今日だけ、素直になつてみてもいいよね？」ボソツ

§ ?? 「雪ノ下さん、すいません。待たせてしましたか？」ハアハア

八幡 side

八幡「さて、駅前に来てみたが： つて、雪ノ下さん、もう来てるし。走るかな。」
タツタツタツ

八幡「雪ノ下さん、すいません。待たせてしましたか？」ハアハア

陽乃「お、比企谷君ひやつはろ。お姉さんを待たせるなんていい度胸してるじゃない。」ニヤニヤ

八幡「少し野暮用がありまして。。。」（言えねーよな。あなたへの）プレゼントを考え
てましたなんて。」

陽乃「ふえつ？ひ、比企谷君。それ、ほんと？」

八幡「それってなんのことですか？」（てか昨日もそうだつたけど）ふえつ？つてなん
だよ。普段どつちかというときれい系の雪ノ下さんがかわいく見えちまうじやねーか

よ。」

陽乃「きれつ！かわつ！」プシュー

八幡「ん？どうしましたか？」

陽乃「比企谷君。全部声に出てる…」プシュー

八幡「全部声に？…つてあ

やつちまつた

」。ごめんなさい。怒らせてしましたよね？」

陽乃「ん”ん”。だ、大丈夫だよ、怒つてないから。」

八幡「そうですか。あー、とりあえずばれてるみたいなんで先にこれ渡しますね。お

誕生日おめでとうございます。」

陽乃「わー、開けていい？」

八幡「どうぞ。気に入りませんでしたら捨ててください。」

陽乃「わーすごくおしゃれなブレスレット！ありがとう比企谷君！早速つけてもいいかな？」ソワソワ

八幡「気に入ってくれてよかつたです。それはもう雪ノ下さんのなんですから俺が決める権限ないっすよ。」ブイツ

陽乃「ねね、どう？似合つてる？」

八幡「そりや、陽乃さんが付けてるところを考えながら選んだものなんですかから似

合つてないわけn…。」カオマツカ

「今の発言なかつたことにしてください…。」プシュー

陽乃「う、うん。てか駅のそばでこんなことしてたら邪魔になつちやうから、少し移動しない？私が比企谷君に見せたいところがあるんだ！」

八幡「わかりました。行きましょうか。」

§

陽乃 side

陽乃「（いやー、うれしいな）。比企谷君からのプレゼント。それに私のことを普段は綺麗で今日はかわいいって。すごくうれしい。もう好きが止まらないよ。雪乃ちゃん。ここまで待つても何もなかつたんだから私が手を伸ばしてもいいんだよね？）ささ、比企谷君乗つた乗つた！」

八幡「驚いた。雪ノ下さんも運転できるんですね。てつきり築地さん？にまかせつきりなのかと。てか助手席強制ですか…。」

陽乃「わたしは取れる資格は取つておきたい人だからね。あ、拒否権無いからね（でも、免許持つてて正解だつたな。初めて助手席に座らせるのは比企谷君つて決めてたけ

ど、いざ実践となると緊張しちゃうな。」

八幡 「なんだか少し落ち着かねえ…。ところで雪ノ下さんが連れていきたい場所つてここから近いんですか?」

陽乃 「うん、そんなに離れてないよ。大体車で10分くらい。」

八幡 「なるほど。楽しみにしますね。」

〈七分後〉

陽乃 「ささ、ついたよ。 (はあ、緊張してあんまりお話できなかつたな。)」

八幡 「運転ありがとうございます。」

陽乃 「ここが君に見せたかつた場所! 私のお気に入りの場所なんだ。比企谷君風に言うとベストプレイスつてやつ。」

八幡 「こんな空き地がお気に入りなんですね。」

陽乃 「ここはうちの会社の持つてる土地だから私くらいしか出入りしてないところなの。」

八幡 「なるほど。」

陽乃 「ねね、空を見上げてみて!」

八幡「…。すごい…。自分の語彙力をフル動員してもすごいとしか言えないです。」

陽乃「わたしはね、昔から何か嫌なことや悲しいことがあつたらここで空を見上げてるの。でも来年にはここにも家を建設し始めるみたいでさ。その前に君とこの日にこの夜空を見たかつたんだ。あつ、別に家が建つことに反対してるわけじゃないの。会社の土地だしね。だからこそ君にだけは知つてほしかつたの。ここで”二人で見た”この夜空のことを。（今夜のことは私の一生の思い出だな。さて、そろそろ私も覚悟を決めようかな）」

八幡「すぐきれいだ…。」

陽乃「ほんとにきれいでしょう。わたしも毎回驚くもん。（びっくりしたー。少し自己意識過剰かも知れないけど、私に言つてるのかつて思つちやつた。）」

§

八幡 side

八幡「（雪）ノ下さんのその顔が）すぐきれいだ…。」

陽乃「ほんとにきれいでしょう。わたしも毎回驚くもん。」

八幡「つつ！（やべー声に出てたか。でも前半部分が漏れなくてよかつた）」

陽乃「比企谷君、今日はありがとね。素敵なプレゼントももらつたし最高の思い出になつたよ。」

八幡「いえ。こちらこそありがとうございます。（こんなものを貰えたのなら、あのブルースレットを買った甲斐があつたつてもんだな。）」

陽乃「ね、比企谷君。」

八幡「何ですか？（どうしたんだろうか、急に改まつて。）」

陽乃「わたしね、君のこと好きになつちやつたの。だから、付き合つてください！」

§

陽乃 side

陽乃「ね、比企谷君。（いよいよかく、告白する側つてこんな感じだつたんだな～）」

八幡「何ですか？」

陽乃「わたしね、君のこと好きになつちやつたの。だから、付き合つてください！（神様、今だけは私に味方をしてください！）」

八幡「…。雪ノ下さんのその表情。いつもみたいにからかつてているわけじやなくて本気、なんですよね。」

陽乃「うん。私の嘘偽りのない気持ち。（信じてもらえないよね…）」

八幡「そのー、えっと、あのー…。こんな自分なんかでいいのならよろしくお願ひします。」

陽乃「えつ? ほんとに? いいの! (よかつた~, すぐ緊張した~)」

八幡「は、ひやい!」

陽乃「ありがとう! 最高の誕生日だつたよ! (ほつぺにならしちやつてもいいよね?)」 チュツ

§

八幡 side

陽乃「わたしね、君のこと好きになつちやつたの。だから、付き合つてください! (

八幡「…。雪ノ下さんのその表情。いつもみたいにからかっているわけじやなくて本気、なんですよね。(こんなに真剣な表情見たことがないしな。それに仮面が完全に取れてる。本気なんだろうな。)」

陽乃「うん。私の嘘偽りのない気持ち。」

八幡「(正直言つて雪ノ下さんは苦手な人間。だけど今日プレゼントを選んだ時にすごく心が躍つていた。あー、俺つてば“陽乃さん”的こと好きなんだな。) そのー、えつ

と、あのー…。こんな自分なんかでいいのならよろしくお願ひします。』

陽乃「えつ?ほんとに?いいの!」

八幡「は、ひやい! (あー、おもいつきり噛んじやつたよ。恥ずかしい…。)』

陽乃「ありがとう! 最高の誕生日だったよ!」チュツ

八幡「(俺、もう死んでもいいや)」プシュー

The end: